2021.12.05 伊藤功治制作

高島高 文学年表［戦前］

1910.7.1 – 1955.5.12

1930（7月で21歳） 1931（21歳） 1932（22歳） 1933（23歳） 1934（24歳） 1935 1936（26歳） 1937（27歳） 1938（28歳） 1939（29歳） 1940（30歳） 1941（31歳） 1942（32歳） 1943（33歳） 1944（34歳）

高島高 1936年頃

モダニズム

昭和医学専門学校 出版部

「学友会誌」 昭和医学専門学校 ［高寄稿1930.12～35.1］

北川冬彦

『学友会誌』5号1932.12

高の詩収録アンソロジー

『新鋭詩集』1935.2

『新日本詩鑑』1938.12 『全日本詩集』1939.8 『培養土（麺麭詩集）』1941.2 『昆侖詩文集』1941.11 『現代日本年刊詩集』1941.7 『辻詩集』1943.10

散文詩

北川冬彦グループ 1933–

詩誌「麺麭」 1932.11–38.1 山口孫太郎 編 麺麭社 ［高寄稿1936.1～38.1］

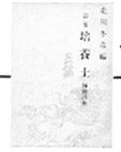
北川冬彦 1900-90 淺野 晃 1901-90 神原 泰 1898-1997 瀧口武士 1904-82 尾崎一雄 1899-1983
神保光太郎 1905-90 仲町貞子 1894-1966 永瀬清子 1906-95 殿内芳樹 1914-93 桜井勝美 1908-95
矢原礼三郎 1915-505 半谷三郎 1902-4 長尾辰夫 1905-70 井上良雄 1907-2003 高島 高 1910-55

『麺麭』1938.2

ネオリアリズム

詩誌「昆侖」 1938.8–43.9 田畑忠彦（北川冬彦）編

北川冬彦 1900-90 永瀬清子 1906-95
菊岡久利 1909-70 瀧口武士 1904-82 高島 高 1910-55 淺野 晃 1901-90
桜井勝美 1908-95 長尾辰夫 1905-70 町田志津子 1911-90 飯島 正 1902-96 鎌原正巳 1905-76



『辻詩集』1943.10

戦争詩

昆侖社 ［高寄稿1938.8～43.5］

＊5号（1939.10）～16号（43.5）まで肉筆回覧板として12冊刊行

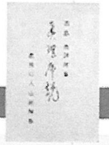
佐藤惣之助

『昆侖』1938.8

『昆侖詩文集』1941.11

太平洋戦争開戦

『人生記銘』1943.11と『久遠の自像』1942.12



『眞理序説』1943.12

高の詩のテーマ

横浜・波止場・都会・恋愛・心象

故郷［北アルプス・宇宇月・海］・風景・季節・戦争・人生

略歴（二十歳以降）

十二月、「学友会誌」三号に小説「孤独なる日記」
昭和医学雑誌部に入部
大岡山に下宿
四月、昭和医学専門学校入学
日本大学文科を中退

実家の高崎医院、滑川ではじめての洋館を建築

十二月、「学友会誌」三号に小説「孤独なる日記」
大岡山に下宿
四月、昭和医学専門学校入学
日本大学文科を中退

詩集パンフレット第一集
『太陽の瞳は薔薇』（私家版）**発行**
「太陽よ」「幻想」「憂鬱」など三十四篇
月、「学友会誌」四号に小説「山の秋」、詩「冬の夜の海辺の家で」

十二月、「学友会誌」五号に詩「波止場で」「夜」、小説「島に憩ふ」

十二月、「学友会誌」五号に詩「波止場で」「夜」、小説「島に憩ふ」
越中谷利一、原田勇を知る

詩集パンフレット第三集
『うらぶれ』（私家版）**発行**
「死の舞踏」「影」「仮面」など四十篇
詩集パンフレット第二集
『ゆりかご』（私家版）**発行**
「月夜の思慕」「母」など十七篇
三月、東京市荏原区中延の桜井宅に下宿に転居

十二月、「学友会誌」六号に詩「青白き断層」「相寄る絶望」、小説「寂光」
八月、塩田光雄の「地平線」同人に
萩原朔太郎、北川冬彦、千家元麿、佐藤惣之助選考詩コンクールに「北方の詩」一等当選
越中谷利一の家で山之口貘、花田清輝らを知る

十二月、「新鋭詩集」に詩「空腹」「夕釣り」
二月、「学友会誌」七号に詩「埋火」「顔」「面影」「ひとりで笑って」「夜半の感情」、小説「杉」

九月、第一詩集
『北方の詩』（私家版）
発行、九篇

「麺麭」十一月号に詩「チェホフと医学」「警察学放談」
「北方の秋」
「秋風の歌」出版記念会参加
三月、昭和医専卒業
一月、東京第二回麺麭の会に出席、入会

高（左）とし子（右）

夏、滑川の実家に転居

十二月、心臓疾患で倒れ、療養
六月、佐藤惣之助、滑川に来訪
四月末、父が病気となり、滑川に帰って病院を継ぎ開業
四月、「風流陣」の八十島稔の句集『柘榴』出版記念会出席
二月、横浜詩人クラブの詩話会に参加

十二月、山之口貘、宿舎に来訪
十月、横浜の病院宿舎に転居
九月、「風流陣」第三十一冊に「秋」掲載（俳号は鷹鳴）
七月、第一詩集『北方の詩』（ポン書店）**刊** 四十四篇
二月、高道とし子と結婚

竹森一男（左）原田勇（右）

十一月、原田勇と竹森一男が来訪

十一月、原田勇と竹森一男が来訪

二月、第二詩集『山脈地帯』（旗社）**刊** 三十七篇

十一月、「培養土」に「孤軍奮闘」
二月、「培養土」に「北方光景」

十一月、**詩散文集『久遠の自像』**（私家版）**刊**
十一月、父・地作死去
十月、高志人に「孤軍奮闘」
二月、「培養土」に「北方光景」

十二月、詩散文集『人生記銘』（私家版）**刊**
十一月、『睡濤庵半茶遺稿集』刊
九月、「高志人」詩壇の選者になる
六月、「青年作家」同人に
五月十一日、萩原朔太郎、十五日、佐藤惣之助死去

十二月、詩散文集『眞理序説』（私家版）**刊** 五十八篇
十月、「辻詩集」に「それなら」
十月、軍医として応召「フィリピン、シンガポール、タイ、ビルマ転戦」
六月、庭に父・半茶の句碑を建立
二月、山本和夫来訪

戦地より「高志人」へ詩「昭南兵舎近くにて」送付
六月、東部八五部隊伊隊配属
戦地シンガポールへ

萩原朔太郎1886-1942

『北方の詩』1938.7

『山脈地帯』1941.2

淺野 晃

高島高詩集

『太陽の瞳は薔薇』1932

詩集パンフレット第1集
『太陽の瞳は薔薇』
1932 白銀繁生 序

詩集パンフレット第2集
『ゆりかご』 1934

詩集パンフレット第3集
『うらぶれ』 1934
越中谷利一 原田勇 序

詩集『北方の詩』
（私家版）1935.9
山之口 貘 序

詩集『北方の詩』
1938.7 ポン書店
萩原朔太郎 北川冬彦 序

詩集『山脈地帯』
1941.2 旗社出版部
淺野 晃 序

詩散文集『久遠の自像』
（私家版）1941.11

詩散文集『人生記銘』
（私家版）1942.12

詩散文集『眞理序説』
（私家版）1943.12

郷土史研究

「高志人」 1936.9– 翁 久允 編 1888-1973 立山町
高志人社 ［高寄稿1940.3～56.4］

高橋良太郎 1902-77 藤田健次 1891-1968 金尾梅の門 1900-80 鍋島貴朔
片口江東 1872-1967 藤井尚治 1888- 石田外茂一 1901-76 高島 高 1910-55
北川蝶児 1898-1972 福田正夫 1893-1952 増田永修 1895-1978

一時期改題「高志」1944.6–45.6

医学と文学

昭和医学専門学校雑誌部 左から二番目が高 1935

白銀繁生

越中谷利一 ⇆ 山之口 貘 ⇆ 楢島兼次 ⇆ 原田 勇

プロレタリア文学

越中谷利一グループ 1933頃–

越中谷利一 1901-70
原田 勇 花田清輝 1909-74 大谷藤子 1901-77
楢島兼次 伴野英夫 高島 高 1910-55
山之口 貘 1903-63 田郷虎雄 1901-50 高見 順 1907-65

山之口 貘

伴野英夫 ⇆ 高見 順

花田清輝

ドイツ哲学

「世代」 1936.4～41 坂田徳男 原田勇 編 世代社

金子光晴 1895-1975 中岡宏夫 1910- 高橋義孝 1913-95 竹山道雄 1903-84 高田博厚 1900-87
山之口 貘 1903-63 草野心平 1903-88 野上豊一郎 1893-1950 野上弥生子 1885-1985 河盛好蔵 1902-2000
花田清輝 1909-74 長谷川四郎 1909-87 谷川徹三 1895-1989 豊島与志雄 1890-1955 高島 高 1910-55

翁 久允

『風流陣』1938.11

新興俳句

俳誌「風流陣」 1935.10–44.5 岩佐東一郎 八十島稔 編 文藝汎論社 / 風流陣発行社 ［高寄稿1931.9～44.1］

室生犀星 1889-1962 岡崎清一郎 1900-86 扇谷義男 1910-92 城 左門 1904-76 坂本越郎 1906-69 安藤一郎 1907-72 室生とみ子 1895-1959 竹中 郁 1904-82 丸山 薫 1899-1974
竹村俊郎 1896-1944 田中冬二 1894-1980 川田総七 1915-52 村野四郎 1901-75 那須辰造 1904-75 近藤 東 1904-88 佐藤惣之助 1890-1942 乾 直恵 1901-58 高島 高 1910-55
津村秀松 1876-1939 吉川則比古 1902-45 北園克衛 1902-78 笹沢美明 1898-1984 瀧口武士 1904-82 永田助太郎 1908-47 小笠原啓介 1913-95 正岡 容 1904-58 伊東月草 1899-1946

高見 順

詩精神

松尾芭蕉
千利休

良寛

宗教思想

相馬御風 1883-1950

相馬御風

岩佐東一郎

竹森一男

青森誌

「旗」「文學研究」1930.7–
竹森一男 1910-79
中岡宏夫 1910-

詩誌「詩人時代」1931.5–
吉野信夫 1908-36

詩誌「地平線」1933.6–
塩田光雄

「文藝首都」1933–
竹森一男 1910-79

「日本詩壇」1933.4–
吉川則比古 1902-45

詩誌「日本詩」1934.9–
明松次郎

詩誌「文藝汎論」1931–
岩佐東一郎 1905-74

詩誌「詩学」1935.3–
鳥羽茂 1910-39

詩誌「羅曼」1935.5–
伊福吉部隆 1898-1968

「科學ペン」1936.10–
長田恒雄 1902-77

第三次「早稲田文學」1934–
青柳優 1904-44

「三田文學」1926.1–
和木清三郎 1896-1970

「はくてい」1937–
泉 潤三 1905-40

「スバル」1938.1–
席田宙外 1909-2003

「歌謡詩人」「藝園」1938.2–
藤田健次 1891-1968

「文學層」1939.3–
岡 勇

「文化組織」1940.10–
文化再出発の会

詩誌「詩原」1940.3–
伊勢八郎 1905-

「青年作家」1942.2–
青年作家社

文学

'30.4 新興芸術派クラブ創設立
'30.9 「ナップ」創刊
'31.5 セルバン創刊
'31.11 ナップ解散コップ結成
'32.1 「プロレタリア文学」創刊
'32.3-6 コップ弾圧
'33.2 小林多喜二虐殺
'33 プロ文学雑誌発禁
'34 日本プロ作家同盟解散
'35 転向文学増大
'35.9 芥川・直木賞授賞
'35.11 日本ペンクラブ結成
'36.3 文芸懇話会創立
'36 思想と実生活論争
'37.2 文化勲章制定
'37.8 日本文化中央連盟創立
'38.3 石川達三筆禍事件
'38.9 陸海軍作家部隊中国へ
'38.11 日独文化協定
'39 国策・戦争文学流行
'39.11 東亜連盟協会結成
'40.10 日本文芸中央会結成
'41.1 写真雑誌廃統合
'41.7 満州文芸家協会設立
'42.2 日本小国民文化協会設立
'42.5 日本文学報国会創立
'43 出版社整理195社に
'43.8 大東亜文学者決戦大会
'44.3 国語学会創立

社会

'30.2 共産党員大量検挙
'30.4 ロンドン条約調印
'31 ナチス台頭
'31.9 満州事変
'31.12 犬養毅内閣成立
'32.1 上海事変
'32.3 満州国建国宣言
'32.5 5・15事件
'32.10 リットン報告書公表
'33.1 ヒトラー内閣成立
'33.3 日本、国際連盟脱退
'34.3 満州国溥儀皇帝に
'34.4 帝人事件
'34.6 文部省思想局設置
'35.2 天皇機関説問題
'35 ナチス、ユダヤ人追放
'36.2・26事件
'37.12 南京虐殺
'37.7 盧溝橋事件
'37.11 日独防共協定
'38.4.1 国家総動員法公布
'38 日本軍中国戦線拡大
'39.5 ノモンハン事件
'39.9 ドイツ・ポーランド開戦
'40.3 社会大衆党分裂
'40.9 日独伊三国同盟
'40.10 大政翼賛会結成
'41.4 日ソ中立条約
'41.6 独ソ戦開始
'41.10 ソルゲ事件
'41.12 英米と開戦
'42.3 東京初の空襲警報発令
'42.6 ミッドウェー海戦
'42.9 横浜事件
'43.5 コミンテルン解散
'43.11 英空軍ベルリン空襲
'43.12 学徒出陣
'44.6 マリアナ沖海戦
'44.8 学童疎開